

Title	鏡花初期作品の執筆時期について：『白鬼女物語』を中心に
Sub Title	
Author	松村, 友視(Matumura, Tomomi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1985
Jtitle	三田國文 No.4 (1985. 10) ,p.29- 39
JaLC DOI	10.14991/002.19851000-0029
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19851000-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鏡花初期作品の執筆時期について

——『白鬼女物語』を中心に——

松村友視

現存する泉鏡花の自筆原稿についてみる限り、紅葉による添削は明治二六年以前の執筆と考えられる『両頭蛇』(のち『蛇くひ』と改題)にはじまり、同二七年九—一〇月頃の執筆と推定される『旅僧』『取舵』で終わっている。従ってこの間の作品についてはどこまでが鏡花でありどの部分が紅葉によるのかを見極める必要があるが、いまは個々の作品についてその詳細を記する余裕はないので紅葉添削の要点のみを左に列挙する。

- 1 句読点の加筆⁽¹⁾
 - 2 誤字・仮名遣・用字の訂正改変
 - 3 生硬な表現の改変
 - 4 不自然な設定の削除・改変⁽²⁾
 - 5 会話の加筆挿入及び改変⁽³⁾
 - 6 作者の個人的閱歴や感情を直接反映させた部分の削除⁽⁴⁾
 - 7 観念的・抽象的な部分の削除⁽⁵⁾
- ところで右のような紅葉添削の手を離れて鏡花が実質的に独立し

たのは博文館の『日用百科全書』編集のために紅葉宅を出て大橋乙羽宅に移った明治二八年二月以降のことと考えられるが、同年四月に『文芸倶楽部』に掲げられた『夜行巡査』は、その意味で、単に文壇的成功作というだけでなく、独立後の鏡花の第一歩として記念すべき位置を担うことになる。以後鏡花は自らの意志で作品を仕上げ、自らの判断でそれを発表していくことがある程度可能になったと考えられるのだが、このことは逆に、それ以前の作品の発表については紅葉の作品評価にもとづく選択が大きく関与していたことを物語っている。

自筆原稿に紅葉添削の跡を留めながら明治二八年二月以降に発表された作品のうち、推定執筆時期と比較して明らかに発表が遅れたと思われるものを挙げれば、『両頭蛇』『怪語』『貧民倶楽部』『蝦蟆法師』『お弁当三人前』などがあり、また『妖怪年代記』は添削跡を留めないものの、鏡花宛紅葉書簡で「文章は無難の出来なり」とされながら「然れども脚色面白からざれば物にはならず」と評価されている。

つまりこれらの作品は二八年二月以前の段階で紅葉の評価を得ら

一之巻	二之巻	三之巻	四之巻	五之巻	龍潭譚	勝手口	六之巻	五之巻	化鳥
29・5	29・6	29・8	29・9	29・10	29・11	29・12	29・12	30・1	30・1
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
34	38	20	26	18	46	64	19	25	50
慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶
20×20	20×20	20×20	20×20	20×20	20×20	20×20	20×20	20×20	20×20
総	総	総	総	総	総	総	総	総	総
普通	普通	やや雑	やや雑	雑	普通	やや雑	雑	雑	やや雑
c	c	c	c	c	c	c	c	c	c
D	D	D	D	D	D	D	D	D	D

参 考

飛縁魔物語	白鬼女物語	白鬼女物語(別稿)
未	未	未
ナシ	ナシ	ナシ
3	18	2
石	石	石
20×20	25×24	25×24
一丁総 他ナシ	ナシ	ナシ
清書	丁寧	丁寧
c	c	c
/	B'/D'	/
	「会話、文語体	

不 明

明28・6・7	6・10	6・10	6・10	6・10	11・12
時計哲学	非戦闘員	非戦闘員	妙の宮	売ト先生	海城発電
ノチ八萬六千 四百回	ノチ海城発電	ノチ海城発電			
28・8	29・1	29・1	29・7	未	29・1
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
2	1	4種	8	20	39
石	石	石	石	石	慶
20×20	25×24	20×20	20×18	20×20	20×20
ナシ	ナシ	ナシ	総	ナシ	総
丁寧	丁寧	丁寧	やや雑	普通	普通
c	c	c	c	c	c
D	D	D	D	D	D

れなかった作品ということになるのだが、完成度の問題をひとまず
措けば、右の一群に特異な傾向の作品が多いことは明らかであり、
それが当時の紅葉の作風や文学観と相容れないものであったことも
また確かである。しかしそれだけに、これらの作品には文学的出発
期における鏡花の本質的な要素が生まのまま表出されていることが
十分考えられる。例えば『怪語』が湯浅しげなる女性への思いを綴
った作品として鏡花文学の一点をなすことはすでにくつかの指
摘があるし、『お弁当三人前』は亡母への思慕を定着させた最初の
作品である。さらに『両頭蛇』『貧民俱樂部』『蝦蟇法師』に描かれ
る醜怪さが反日常の意識を内包する点で鏡花文学の本質と深くか
わることはいうまでもない。従って右の作品群はその後の鏡花文学
の迫るべき方向をすでに胚胎させていたとみてよいものであり、そ
れらが紅葉の選択によって少なくとも二八年二月以前には発表の機
会を与えられなかったという事実の意味するものは小さくないとい
わねばならない。

このように鏡花の初期作品には先に列挙したような主として技術
面での細かな添削のほかに、紅葉自身の文学観や創作意識にもと
く作品の評価選択という大きな意味での添削作業が施されていたと
みてよい。従って鏡花文学の出版期のあるべき正真正正に把握するた
めには、紅葉の選択という事情をも勘案した上で、発表の順序では
なく執筆の順序に作品群を還元し、それを辿り直す作業が不可欠に
なると思われる。

初期作品の執筆時期の問題に関してはすでに越野格・小林輝治・
弦巻克二の各氏に先行研究があるが、小稿ではそれらを参照しつ
つ、自筆原稿の残る作品について新たに執筆時期を推定し「初期自

筆原稿執筆時期推定一覧」(以下「一覧表」と略す)として示した。

初期作品の執筆時期推定の方法としては紅葉書簡等の外部資料に
よる以外に作風や文体による方法があるが、すでに一端をみたよう
に、初期作品の場合執筆時期と発表時期とが極めて錯綜しているた
め、まず執筆時期がある程度確定しない限り特定時期の作風や文体
という言い方は必ずしも確実性をもちえないし、作風や文体の判断
が主観に頼らざるをえないという問題もある。また小林輝治氏は自
筆原稿における「な」の字の字体の変化に注目して自筆原稿全般に
わたり執筆時期を推定されているが、実際に原稿にあたってみると
同一丁の中に異なる二種の字体が用いられている場合もあり、そこ
には計量的判断が入りこまざるをえない。

こうした点を考慮し、一覧表では、より客観的と考えられる推定
材料として自筆原稿における句読点の有無(abcの三種)と会話
文の「」のつけ方(ABCDの四種)の組み合わせを中心に、そ
の他の資料を勘案して執筆時期を推定した。

まず句読点についてみると、「句読点なし」を意味する「a」は
『両頭蛇』のみにみられる形であり、この点からも同作品が最も初
期に属することが裏づけられる。「b」(読点のみ)は明治二七年一
〜八月頃にあたる金沢婦郷の間のみにあらわれると推定される特徴
的な形式として注目される。また「c」(句読点あり)は前後二回
あらわれているが、「参考」欄に示した後の作品がすべて「c-d」
の組み合わせをもつことからこの形が最終形であるとみてよい。

例えば『お弁当三人前』は明治三十一年に一部が発表されたのち同
三九年に至ってはじめて全体が発表された作品だが、越野格氏に指
摘のあるようにこの自筆原稿には明治二七年七月一〇日から金沢で

開催された「関西府県連合共進会」の記事が「一と月前」のこととして出ることから推して二七年八月の執筆と推定するのが自然であり、同原稿が「b」の形式をもつことは二七年の帰京時の執筆であることを裏づけている。

次に会話文の「」のつけ方についてみると、「C」はやや例外的だが、ほぼA↓B↓C↓Dの形で順次変化している。従って例えば『貧民倶楽部』は鏡花宛紅葉書簡⁽¹¹⁾からみて明治二六年末〜二七年二月頃の執筆と考えられることは基本的にまちがいないが、慶応義塾図書館所蔵の原稿が「」を閉じたあとに句点を打つという特殊形を含めてA↘Dの段階をすべて含んでいることは、この原稿がその後の紅葉添削にもとづく改変を含め異なる時期に執筆された幾種類かの原稿を合綴したものであることを物語っている。

以上を概観すると、明治二七年の金沢帰郷中の作品の多くが「b―B」の形式をもつこと、そして二七年九月以降、すなわち帰京の後はずべて「c―D」の形式に変わっていることがわかる。

『旅僧』は、紅葉書簡で『入水』とよばれている作品がこれにあたると考えられたことなどから従来明治二七年二〜三月頃の執筆と推測されてきたが、『入水』は『旅僧』ではなく『鐘声夜半録』にあたるとし『旅僧』を『取舵』と同時期の執筆と推定された弦巻克二⁽¹³⁾氏の説に従えば、これは明治二七年九〜一〇月の執筆ということになる。同作品の原稿が「c―D」の形式をもつことはその可能性が高いことを示唆しており、そこから逆に『入水』が『鐘声夜半録』であることが確認され、さらには『入水』に言及している紅葉書簡の推定時期変更の必要が生じてくることになるのである。

このように自筆原稿の句読点や「」のつけ方、あるいは行・字

数⁽¹⁴⁾などからは執筆時期に関するいくつかの事実の推定もしくは確認が可能だが、個々の説明は煩瑣にわたるので、他については推定結果を示した一覧表に譲ることにしたい。

二

執筆時期の確定しにくい初期作品の中でもいまだにそれが不明のままであるものに『飛縁魔物語』と『白鬼女物語』がある。ことに『白鬼女物語』については『高野聖』（明33・2）の原型と考えられる点もあつて従来いくつかの異なった説が提出されている。

まず村松定孝氏は、この原稿が別稿を含めて金沢の目細家に保存されていたことから、鏡花の金沢在住もしくは帰郷の時期に注目し、明治二二、三年・同二六年・同二七年の三つの可能性を示した上で、二六年は帰郷の期間が短かく、また同年の執筆とされる『怪語』の用字・文体とちがうことを理由に除外し、二七年も当時の観念小説的な作風と異なる点と、原稿にみられる水ぬれの跡が明治二五年の金沢大火の際のものと考えられることからこれも除外して、残る二二、三年説を提出された。

これに対して三田英彬氏は、作品中に描かれる夏の春日野峠越えは明治二五年以降の体験によるものであり、小品『麻を刈る』（大15・9〜10）に描かれる同様の体験が二六年のものであることなどを理由に二六年説を示されている。

また越野格氏は二七年の金沢帰郷中の可能性が高いとされ、笠原伸夫氏はルビや句読点の打ち方などから二六年説に賛成されている。さらに小林輝治氏は「な」の字の字体などにもとづいて二七年説をとっており、新保千代子氏は目細家に残る原稿全般との関わり

から二五年一月以降二七年の上京までと推定されている。

石川近代文学館所蔵の『白鬼女物語』原稿には本稿・別稿の二種があり、別稿は会話文の部分を除くが、本稿の会話文は文語体で書かれている。この点からすれば二七年以前の作品であることも考えられるのだが、全体が一人称の語りの形式によっていることを考慮に入ればこれは決定的な根拠とはならない。

また一覧表に示したように会話文の形式も、句点及び“”の受けがありながら改行しないという特殊形を示している。これは、改行という点に注目すれば「B」の例外という意味で「B'」となり「c-B」の形式をもつ二六～二七年の執筆の可能性が高いとみることもできるが、句点に注目すれば「D」の特殊形として「D'」となるから「c-D」の形式、即ち二七年九月の上京以後の執筆ということになる。

『白鬼女物語』についてもうひとつ注目されるのは、別稿の二丁も含めて、いずれも赤色の罫のある二五行×二四字の和紙の原稿用紙に毛筆で書かれている点である。現存する原稿をみる限り、鏡花が罫入りの原稿用紙を用いるのは『留守見舞』（明37・3）の和紙の原稿用紙が最初である。ただしこれはむしろ特殊な例であって、しばしば用いられるようになるのは明治四四年六月発表の『池の声』以後のことだが、それらはすべて西洋紙の原稿用紙にペン書きである。従ってそれ以前の自筆原稿で罫入りの原稿用紙を用いているのは殆ど唯一の例外といってよい。しかし、これと全く同種の用紙に毛筆で書かれた自筆原稿が『白鬼女物語』のほかに実はもう一枚だけ存在する。『海城発電』（明29・1）の原型である『非戦闘員』書き出しの断片五種のうちの一枚がそれである。

五種の断片はすでに新保千代子氏によって「鏡花研究」創刊号（昭49・8）に翻刻されているが、便宜上、その一部をここに抄出する（題名の上の番号及び本文の傍線は私に補った）。

(1) 非戦闘員

（上）

海城付近の戦に於て赤十字の護手一名行衛不分明となりけるが敵の爲に捕へられしともいひはた何処にか潜みつつ活路を発見すべき機会の到るを待つなりとも謂へり。

予は其に着きて多分其ならむと推量すべき一条の哀なる物語を知れり。（以下略）

(2) 非戦闘員

上

「旦那、此様な酷い吹雪には逢つたことがありますん。」

「ふむ」

とばかり冷やかに答へたる人物は我が日本国東京府下の某新聞より特派したる一個年若き従軍記者なり渠は紅瓦塞の戦を觀むと欲して今朝未明に海城を出発し来れるが野とも謂はず川とも謂はず唯一面に吹捲くる紛吹雪のために道を失して東西を分たざるより途中にて一人の支那人を道案内に備ひつつ此処にまで到りしなり。（以下略）

(3) 非戦闘員

第一

「先生、此方へ。」

といひさま一人の軍夫は今端なくも路頭にて出逢ひたる予が手を取りて導けり。予は東京府の一新聞社より戦地に派遣せられたる従軍記者として多くの競争者を出抜くべき新聞を得むものとして此軍夫にも何等か聞得たることあらば密に知らせくれよと頼み置きたることなれば（以下略）

(4) 非戦闘員

上

「外山謙吉、お前が劉永叔の家に行ったのは軍医の命令であつたと謂ふな。」

「唯」

と答へたるは年紀少き赤十字の看護手なり。渠は三月以前海城付近の戦闘の時敵のために捕へられて多日其消息無かりしものなるが前日意外にも放たれて帰營したるに因り大隊副官は一応其捕虜たりし間の事情をば審問するなり。（以下略）

(5) 非戦闘員

第一

「私の名が聞きたいですか。」

低語ひつつ微笑を含みて静かに左右を胸はしたるは一個年紀若き我が赤十字の看護員なり。其前後と左右を擁りて凡そ十名余の軍夫群りたり渠等は仕込杖棍棒など手に／＼獲物を提げついで眉を昂げ眼を瞋らしはた拳を握りつめて一方ならず激したる状見えぬ。（以下略）

右の各断片のうち、(1)(2)(3)は日本の新聞記者の「予」を語り手とする一人称の形式であり、(4)(5)は「外山謙吉」もしくは「落合謙吉」と名のる赤十字の看護員を主人公とする三人称の形式をとっていることから、岩波版全集の本文と比較して(1)(2)(3)の形がより早い時期の執筆と考えられるが、なかでも(1)は「戦地通信」の題名を「非戦闘員」に改めている点からみて最も早い時期のものと考えてよい。

(2)(3)はほぼ同様の構想を示しているが、(2)は新聞記者「予」が中国人に案内されて吹雪の中を海城から紅瓦塞に向かう情景であり、(3)は同様に新聞記者「予」が日本の軍夫の案内で中国人豪商の家に到るところであつて、全集本と比較して(3)の方が決定稿に近いとみることが出来る。

(4)(5)も互いに似た構想をもっているが、(4)が大隊副官による看護員尋問の場面からはじまるのに対して(5)は軍夫の長とおぼしき人物によって尋問される構図であり、(5)が最も決定稿に近い形を示している。すなわち(1)(2)(3)(4)(5)の順序で書かれたとみられ、このあとに慶応義塾図書館所蔵の『海城発電』自筆原稿が位置することになるのである。

ところで右の五種のうち、『白鬼女物語』と同一の野入り原稿用紙に書かれているのは断片(4)にあたる一枚である。そこで『白鬼女物語』の執筆時期推定の前提として『非戦闘員』の執筆時期が問題になってくるが、小林輝治氏はこれを明治二十七八〜九月と推定されており、それに従うなら『海城発電』は、鏡花自身が『夜行巡查』の構想を得たとしている二十七年九月以前にすでに執筆されてい

たことになるわけだが、この推定は再考を要する。

『非戦闘員』断片(4)には傍線で示したように「三月以前海城付近の戦闘の時」という一節があり、さらにこれより早い形を残すと考えられる断片(2)には「紅瓦塞の戦闘」に言及した部分がみられる。

参謀本部編纂の『明治廿七八年日清戦史』(明治40・10)によれば、日本軍の第三師団による海城攻略は明治二十七年二月一日、紅瓦塞の戦闘は同月一日に行われており、このことは断片(2)に吹雪の描写があることも符合する。さらに断片(4)に「海城付近の戦闘」を「三月以前」のこととしているのにもつげば、海城攻略の三ヶ月後に戦争が継続中であることを知りえるのは実際に三ヶ月を経た時点以外にない以上、少なくとも『非戦闘員』断片(4)の執筆は明治二十八年三月中旬以降でなくてはならない。

右の事実に加えて、これらの原稿が金沢の目細家に保存されていたことを考え併せれば、二十七年の金沢帰郷時ではなくその次の帰郷の時、つまり明治二十八年六―一〇月の帰郷時の執筆と考える以外にないことになる。ついでにいえば、『妙の宮』の「北国新聞」掲載が岩波版全集の著作年表にある明治二十八年七月ではなく翌二十九年七月であることは森英一氏に指摘があるが、この原稿が「C―D」の形式をもち、かつ目細家に保存されていたことからすれば、これも二十八年の帰郷中の執筆の可能性が高いことになり、同様の理由から『時計哲学』『売ト先生』も、従来の推定の二十七年から二十八年に繰り下げるのが適当と思われる。

ところで『非戦闘員』五種の断片のうち唯一野入り原稿用紙に書かれている断片(4)には、『白鬼女物語』と同様、水ぬれによるシミの跡が認められる。そのこと自体、『白鬼女物語』の水ぬれを明治

二五年の大火によるとする説を否定しているのだが、より重要なのは、『非戦闘員』断片(4)のシミの位置と形が『白鬼女物語』別稿の書き出しの一枚のそれと正確に重なるという点である。すなわち両原稿左右の丸いシミと上端下端の各中央部のシミが一致している(写真参照)。

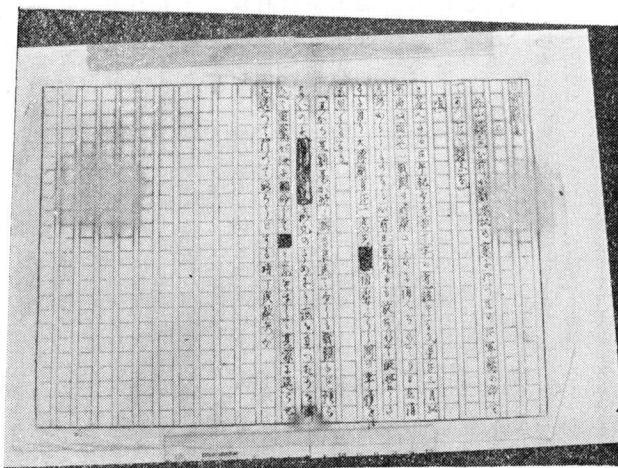
『非戦闘員』の他の四種の断片にも、平行移動した形で位置のずれはあるものの、ほぼ同様の水ぬれの跡が認められる。従ってこれらのシミは、いずれも明治二十八年六月以降の浸水によるとみるのが自然であろう。『白鬼女物語』の原稿は野のみが滲んでおり文字に滲みがみられないことを理由にすでに水をかぶった未記入の原稿用紙を用いたとする三田英彬氏の推測は、水の跡をとどめる他の無野和紙もすべて浸水後に用いられたとする考えが不自然である以上、可能性は薄いとみなければならぬ。

一方、『白鬼女物語』本稿にある水ぬれ跡は別稿及び『非戦闘員』断片(4)のそれとは一致しない。目細家に保存されていたその他の原稿にも水ぬれの跡を残すものは少なくないが、管見では同様の形状のものは見出せなかった。

以上の事実は、『白鬼女物語』別稿と『非戦闘員』断片(4)とが、ほぼ同じ時期に書かれたうえ、両者を重ねて二つ折りにした状態で保存されていた可能性を示唆している。もちろん鏡花以外の目細家の誰かがのちに原稿を整理したことは考えられるが、『白鬼女物語』別稿が同本稿その他とは別に『非戦闘員』断片(4)と重ねられ、かつ『非戦闘員』の他の四種の断片とも近接して保存されていたと推測されること、さらに『白鬼女物語』と『非戦闘員』だけに野入り原稿用紙が使われているという事実は、無視しえないだけの重さをも



『白鬼女物語』別稿



『非戦闘員』断片(4)

っているときよい。そしてこの仮説が正しいとすれば、『白鬼女物語』は明治二八年六〜一〇月の金沢帰郷の間の執筆でなければならないことになるのである。

従来の諸説で二八年の可能性が問題にされなかったのは、村松定孝氏の提示された三つの可能性を含めてこの作品を二七年以前の初期習作であるとする先入観念が働いていたためであらうと思われる。ただ、三田英彬氏は春日野峠越えの体験との関連から二八年も問題にされているが、二八年の帰郷の後に上京した際の体験を描いたとすれば目細家に原稿は残らないとの理由でこれを除外されている。しかし体験の直後に書かれたとする根拠がない限り二八年を否定する理由にはならない。また笠原伸夫氏がルビや句読点に注目された点についても、一覧表についてみたように『白鬼女物語』は二六年、二七年、二八年の三説のいずれとも決定しえない形式をもっていたし、小林輝治氏の「な」の字に関する調査によれば二七年八月以降二九年あたりまではほぼ同じ字体であるからこれも二八年説に流用することができるのである。

このように少なくとも現時点で二八年説を積極的に否定し去るだけの根拠が与えられていない以上、『白鬼女物語』の推定執筆時期を二八年一〇月まで引下げ得るという可能性は確認されておかなければならないと考える。

しかし一方で、以上の論考自体もまた仮説の域を出るものではないという事実も認めねばならない。従ってここでは可能性を提示するにとどめ、作品の内部徴証を含めた事実の解明、及び鏡花文学における意味づけの問題については今後の調査に俟つことにしたい。

注1 『両頭蛇』に典型的にみられるもので、いうまでもなく極く初期の作品に多い。

2 例えば『貧民俱樂部』や『怪語』の一場面に対し「実際になきことなり」「これ以後実際にあらず」等の評を加えてそれを削除している例などがあり、リアリズム作家としての紅葉の一面をうかがわせる。

3 例えば『義血侠血』や『取舵』で、作品の構想に直接関与らない部分に巧みな会話を挿入して場面に精彩を与えている。

4 『蟹の一心』で、鏡花の亡父をモデルとする一心の名人気質を描いた部分を削除しており、また後述するように亡母への思慕を描いた部分も削除されている。

5 『義血侠血』で、語り手による観念的な発言が何か所かにわたって削除されているのが典型的な例としてあげられる。

6 自筆年譜による。ただし『処女作談』(明40・1)では明治二七年一〇月のこととされている。

7 新版『鏡花全集』(岩波書店)月報15所収紅葉書簡13。

8 『妖怪年代記』論―「高野聖」の系譜(一)―(『鏡花研究』第三号、昭52・3)。

9 『両頭蛇』の成立時期については明治二六年説(久保田万太郎)、二四五年説(村松定孝)などがある。ただし作品中に「上野の汽車最後の停車場に達すれば、確水峠の馬車に揺られ、再び汽車にて直江津に達し」との一節があり、「日本国有鉄道百年史」第二巻(昭45・3、日本国有鉄道)によれば、横川―軽井沢間の開通は二六年四月一日であるから、『両頭蛇』の成立は二六年三月以前ということになる(近藤千歳・松本里江子両君の調査報告にもとづく)。なお、作品中、古老が児童に向かって「何ぞ君が代を細石に寿さざる!」という場面があり、文部省が『君が代』他七編について学校の祝日大祭日儀式に用いる歌詞・楽譜を選定して公示したが明治二六年八月一二日であることを根拠にすれば作品成立は同日以降に繰下げばならないが、明治一三年に作・編曲された同歌は文部省による制定以前にもある程度普及していたことが考えられる(小田切信夫「国歌君が代講話」昭4・8他による)。この点については今後の調査が必要だが、いまは二六年三月以前の成立として下限を示すにとどめる。

- 10 『泉鏡花私説―観念小説―論のための序章』（『国語国文研究』昭50・6）
- 11 新版『鏡花全集』（岩波書店）月報14所収紅葉書簡7。
- 12 新版『鏡花全集』（岩波書店）月報14所収紅葉書簡8。
- 13 『鐘声夜半録』小考（『光華女子大学・光華女子短期大学研究紀要』17、昭54・12）
- 14 『妖怪年代記』は従来明治二七年二、四月頃の執筆と考えられてきたが、弦巻氏は紅葉書簡の推定時期の変更をふまえて同年五月頃の執筆とされた。『妖怪年代記』と『義血俠血』A稿の行・字数が例外的に一致することは、両者が前後して書かれたと考えてよいことを示している。
- 15 『鏡花初期習作「白鬼女物語」と「高野聖」』（『言語と文芸』昭47・10）
- 16 『泉鏡花の文学』（昭51・9、桜楓社）
- 17 注11に同じ。
- 18 『泉鏡花美とエロスの構造』（昭51・5、至文堂）
- 19 注8に同じ
- 20 『売ト先生』をめぐって（『鏡花研究』第二号、昭51・3）
- 21 注8に同じ。
- 22 『作家・泉鏡花の誕生―明治三〇年代文学研究の二三―』（『金沢大学教育学部紀要』31、昭57・2）
- 23 注16に同じ。

小稿は昭和五九年七月一四日に行われた第一回泉鏡花研究会（於上智大学）における口頭発表にもとづくものである。発表後各氏から戴いた御意見を必ずしも小稿に反映できなかった点については今後の課題としたい。また石川近代文学館の新保千代子氏、慶応義塾図書館特殊資料室の田中正之・白石克両氏には自筆原稿閲覧の便宜をはかって戴いた。記して謝意にかえたい。